

日柳燕石の『旅の恥かき捨ての日記』について

板 坂 耀 子

(平成八年九月十日 受理)

一 はじめに

本稿の主旨は、国立国会図書館所蔵の写本一冊『旅の恥かき捨ての日記』が、香川県琴平町出身の幕末の勤皇志士日柳燕石の著作であり、燕石に関する新資料であるということである。さらにまた、この紀行が近世の九州紀行の中でもすぐれた作品として評価できる内容であることも、併せて指摘しておきたい。

二 書誌

まず、『旅の恥かき捨ての日記』の書誌について述べる。

国会図書館わ二九一・九の一。写本二冊。二六・五×十八・二cm。

茶色表紙。題簽なし。第一冊・十四丁、第二冊・十四丁。九行書。本文と別筆の朱多し。上段に墨の書き入れがある。末尾三行に墨の訂正が数ヶ所ある。

外題なし。中表紙題は、第一冊が、

「西遊日記」旅の□□捨□□

西遊日記 上 「」

とある。□□の部分は表紙の傷みがひどく判読できない。第二冊は、

「西遊日記 下」

とのみある。

内題は、第一冊が、「旅乃恥かきすての日記 卷之上」、第二冊が「旅の恥書捨乃日記 卷之下 燕石贅人著」となっている。

序文は次の通りである。

此日記は、旅中矢立の筆にまかしてかきつゞけし物なれば、元より陳芬漢の漢文にも非ず、てにおはの叶へる和文にもあらず。所謂旅のはぢ書捨といふ物なれば、見る人、腹をかゝへて其つたなきを笑んと、燕石

贅人敬て白ス。

また末尾には別筆の書入れで、

文字已経松莊先生之評。余又何言。但下一二謔、聊答来意云。弘申春
日雪航老生妄言。
とある。

三 作者

1 『国立国会図書館蔵江戸期以前紀行写本・版本目録稿』の記述
国立国会図書館参考書誌部編「参考書誌研究」第二〇号・特集「国立
国会図書館蔵江戸期以前紀行写本・版本目録稿」(田口栄一・小泉清子
両氏による)は、この本について次のように記している。
旅の恥かきすての日記(わ291・9の1)

燕石贅人(富永治右衛門尉) 弘化年間 手稿本 2冊 大扉「西
遊日記」(天保15年、改元されて弘化元年九州各国遊覧の記)

この目録は、国立国会図書館蔵の紀行を調査するのに非常に役に立つ
ものであるが、この作者についての記述は誤りである。ここで上がる
「富永治右衛門尉」は、岩波書店「日本古典文学大辞典」の米谷巖氏の
記述を引用すると、

燕石(えんせき) 俳人。富永氏。名は高康。通称治右衛門尉。別号
幽山亭。万治三年(一六六〇)正月二十五日没、享年三十六歳。(後略)

とあって、万治元年に没しており、弘化年間のこの紀行の作者として
は年代が合致しない。

2 勤皇詩人日柳燕石

この紀行中の、作者を推定する手掛かりとなる記述は、序文をはじめ
として数回登場する「燕石贅人」の作者名、同行者である「富山謙益」
の名、また末尾の本文と別筆の書き入れ中で、「松莊先生」が評を下し
たとする「雪航老生」の記述である。また冒頭の文中に「贅人のあざげ
たくまの浦けむり、晴たる空にあは嶋の纜とひて見渡せば」とあって、
作者は現在の香川県託間の浦から船出しており、その付近に住んでいた
人物であることになる。

これらのことから考えると、この人物は讃岐の琴平に住んでいた幕末
の勤皇家日柳燕石であろう。

(イ) 経歴と著作

『日本古典文学大辞典』(岩波書店)の日柳燕石の項(松原知明氏)
には燕石について次のように書かれている。

江戸時代の漢詩人。名は政章。字は士煥、通称長次郎、晩年は耕吉。
燕石は号、別に柳東。父は惣兵衛、讃岐象頭山麓榎井の旧家。慶応四年
(一八六八 明治元年)八月二十五日没、五十二歳。(墓碑銘)。(事跡)
はやく父方の伯父につき、志学の頃、金比羅社の侍医三井雪航、丸亀藩
儒岩村南里に学ぶ。また詩儒尾池松湾と親交を結ぶ。十八、九歳盛んに
金比羅の花街に遊び、二十一歳父母を失い、のち家業を廃して飲博に身
を沈め、常に客を愛し、各地を周遊、その間にも連年詠詩の集が成る。

安政元年（一八九四）呑象楼に移居、賓客堂に満ち、その名も揚がる。慶応元年（一八六五）高杉晋作を庇護した廉で高松の獄に下る。そこでも多くの名作をのこした。慶応四年正月出獄、木戸孝允の招きで上京、孝允に従って中国・九州を遊説、六月には仁和寺宮の日誌方となり北征、柏崎で病没した。（後略）

また、彼の著作として『国書総目録』は、次の十六点を挙げている。

- 燕石詩集 国会図書館所蔵^{（国）}
- 松乃婦多葉 金刀比羅神社所蔵^{（金）}
- 金郷春の夕栄 『日本名著全集 洒落本集』所収
- 呑象楼詩文稿 大阪府立図書館所蔵
- 西遊詩草 『日柳燕石全集』所収
- 山陽詩註 同上
- 十春詞 同上
- 象山竹枝 同上
- 賭博問答 同上
- 捫蝨余話 同上
- 柳東軒雑話 同上
- 柳東軒略稿 同上
- 呑象楼雜纂 『近世漢学者著述目録大成』による
- 呑象楼消夏録 同上
- 柳東軒詩話 同上
- 柳東詩集 『讃岐史料史籍目録大成』による

目録のみに登場する最後の四編は、所在不明である。また、これ以外

にも琴平神社にコピーで所蔵する『満清擾乱記』、瀬戸内民俗資料館が所蔵する写本一冊（『旅路の日記』）がある。大阪府立図書館所蔵の『呑象楼詩文稿』のみは未見だが、それ以外の書にはいずれも、『旅の恥かき捨ての日記』と同一の内容のものはない。

（ロ）漢詩集「西遊詩草」との関係

では、この紀行の作者は燕石ではないのだろうか。『日柳燕石全集』は、梶原猪之松編で大正十二年に香川新報社から刊行されている。古い本だが、『国書総目録』の記述でもわかるように、燕石の著作は、ここに収録される以外には現存しないものが多い。その中で、「西遊詩草」は同一の題で内容の異なるものが二点収録されている。

第一のものは、全集本の二四五～二六三ページにあたり、冒頭に「甲辰（弘化元年）春末、同凌雲、遊九州」とあり、「檀浦」など百編近くの詩を収めている。末尾に「僕今歳同凌雲、遊九州。拙詩近日欲上梓。恨不使老兄評之。（中略）甲辰（弘化元年）秋日 燕石柳彰拜」とあって、弘化元年の九州行を題材としたものである。

第二のものは、全集本の三三七～三四七ページにあたり、冒頭には「柳東章未定稿」とあり、「山口」「小郡駅木戸氏話」など、七十編近くの詩を収めていて、明治元年、木戸孝允との長崎行である。なお、全集所収の「呑象楼遺稿」の石集（四六～五五ページ）に、第一の旅と同時期の詩五七編が、木集（三三七～二四〇）に、第二と同時期の詩三五編がある。

この二つの漢詩集と紀行『旅の恥かき捨ての日記』との行程を比較すると、時期も一致する弘化元年の第一の旅の行程が、紀行と一致することがわかる。おおよそ次の通りの行程である。

壇の浦ゝ小倉ゝ宗像ゝ香椎ゝ青柳ゝ博多ゝ筒井ゝ太宰府ゝ高良山ゝ久留米ゝ柳川ゝ熊本ゝ島原ゝ長崎ゝ大村ゝ唐津ゝ呼子ゝ名護屋ゝ吉井ゝ太宰府ゝ志賀島ゝ名島ゝ黒崎ゝ小倉
また、漢詩の中に、紀行の記述と共通するものが、わずかながら見とれる。

〔漢詩集〕

吉田山中

数里暝行双脚老。荒邨一夜逢高。老嫌憐我有飢色。梁飯盛来凸字高。

青柳駅

短亭破駅傍山陲。大路高低双脚疲。知是平生行客少。也無一馬借人騎。
(ともに「西遊詩草」)

路上所見

路傍有古樟。腹穿一丈強。村人藏其竅。時開樗蒲場。

(吞象樓遺稿石集)

〔紀行「旅の恥かき捨ての日記」〕

やうやう吉田のほり川てふ処に至りて、いといぶせき家に泊る。五平太といふ黒き石にてめしをかしぐ。その煙り、わる臭し。

(四月九日・吉田)

我等初旅なれば、足はれ痛みてあゆみ難し。されど此辺りはさびしき処にて、馬かる事もできざればせん方もなき。顔かくし足をひきづり足引の山坂こえて青柳のあれたる駅にやどりける。(四月十日・青柳)

筒井を立て山家の駅にいたる。路の辺りに大きな楠の木あり。其幹うところになりて、中には廿人ばかりの人をいれる。近比、博ち打、其中にあつまりてばくちうちたりしに、蠟燭より燃上りて大分焚たりといゝけれど、梢は青々と栄へたり。見事なる物也。(四月十七日・山家)

(ハ) 登場人物

また、『旅の恥かき捨ての日記』に登場する人名であるが、いずれも燕石の交遊関係の中に、その名を見ることが出来る。

まず、同行者の富山謙益は、『新修託間町誌』(昭和二六年)所収の、安政二年、山路伯美編『未開牡丹詩』中に、「凌雲 富山徳 字子報 称謙益 讚州託間人」とあり、富山凌雲のことである。『増補改訂・讃岐人名辞書』(昭和三年梶原猪之松著、昭和四八年梶原竹軒監修)では、この凌雲と、末尾の書き入れに登場する「松莊先生」にあたる奈良松莊、「雪航老生」にあたる三井雪航について次のように記している。

富山凌雲 凌雲は三豊郡託間の医師にして医業の余暇詩文を能くす。

燕石の親友たり。弘化元年燕石と俱に九州に遊び同五月帰家す。後燕石は其男三舟を凌雲の許に托し医業を学ばしむ。かくて爾後兩人の間存問経へず、親密の交りを訂したりしが明治十年頃没す。年六十余才。

奈良松莊 名は広葉、字は洗心、号松莊、又翠岸、また泡齋、天明六年那珂郡榎内村に生る、後同郡神野村大字岸上に移る、和漢学に通じ歌を能くし、傍ら書を学ぶ、勤皇の志あり、燕石等と交る、文久二年正月二十八日没す、年七十七才。(後略)

三井雪航、名は重清、字は子潔、通称隆斎、号を雪航と云ふ、寛政七年那珂郡田村に生る、幼少の時琴平の医家三井氏を継ぐ、長ずるに及び家業を承けて医業に従ひ、傍ら儒学を修めて名ありしが其の後弘化年間備後に遊び、菅茶山の門に入り学業を大成し、詩文を能くす、頼山陽、篠崎小竹、後藤松陰等と交り詩文を以て応酬し詩客の名を縦にす、晩年学舎を起し子弟を教授し、名付けて正風館と称せり、地方の学書是れより大いに興起せりと云ふ、嘉永四年六月没せり、年五十六。(後略)

(二)「燕石贅人」の筆名

この紀行の序文の署名は「燕石贅人」である。燕石は非常に多くの号を用いていた。相原友三郎氏「日柳燕石研究」2(昭和四三年 私家版)によると、これは勤皇の徒として幕府に追われる身であったことも作用して、めまぐるしく筆名を変えたという事情もあるようである。相原氏の研究は膨大かつ詳細をきわめており、燕石が使用した号についても次のようなものを、ひとつひとつ解説を附しつつ挙げておられる。

長松・長二郎・長次郎・士煥・子煥・政章・世章・章・彰・鰐石・春園・賢乎已堂・芭蕉書屋・緑天居・蕉陰居・鴛石・文雅叢・容膝堂・篁陰居・有余亭・有余庵・丁字凹亭・可可貧居・可可貧居南軒・吞松樓・柳東軒・柳東・愛松軒・撫松樓・劔山・劔吾・雪月皆宜樓・四時字皆宜樓・皆宜樓・双松閣・双竜閣・吞象樓・吞象樓主人・吞象・觀雷亭・觀雪処・林莊・林亭・島樓・島堂・三白・三桑・九白堂・三晶・杞憂陳人・赤松劍五・劍吾・猷吾・耕吉・浩吉・加島屋・総兵衛・猿赤・艶春・艶史・艶籍・楊生・枯楊・藻東野人・安樂居・安樂居住人・泰樓・半獄舎・半樂居・半樂・蜃氣樓・神樓・鼈穴・鼈居・古狸窟幽人・捫蝨・門蝨(この他、樂王、其命閣・東軒などの号については疑問がある)

一見してわかる通り、この中に「燕石贅人」の名はない。しかし、これだけ多くの号を使った燕石であることから、このような和文紀行の作品に限って用いた名があったとしても不自然ではない。とりわけ、前節で述べたような、漢詩集との内容の一致などから考えても、この紀行は燕石の作品であると考えてよいだろう。

四 燕石の人となり

燕石の経歴は、『日本古典文学大辞典』が述べる通りである。土地の博徒として多数の子分を抱えながら、一方で勤皇思想を抱いて志士たちと交遊し、漢詩や洒落本などを書く文学者でもあるという興味深い人柄のため、田村栄太郎氏『日柳燕石』(春陽堂、昭和十四年)、草薙金四郎氏『勤皇奇傑・日柳燕石伝』(文友堂、昭和十四年)などの伝記研究があり、またラジオ小説や映画にもとりあげられている。「炎は流れる」IV『大宅壮一全集』第二十七巻所収)の中で「勤皇博徒・日柳燕石」の一章を設けて、燕石について詳しく記された大宅壮一氏は、『太平洋戦争』のはじまるころ、『燕石ブーム』といったようなものがおこった。と、このような現象について述べておられ、燕石の勤皇思想が当時の思想状況によく合致する雰囲気を持っていたと分析しておられる。大宅氏はまた、燕石が有した「勤皇家」「詩人」「博徒」という三要素にふれて、「容易にくっつきそうもないこれら三つの要素が、燕石という一つの人格のなかで、珍しい化学反応を呈したところに、大きな魅力があった。」とも述べ、このような人物を生んだのは、琴平という一種の文化都市が果たした役割が大きいと指摘されている。

『日本古典文学大辞典』の記述にやや補足しておくと、彼が十八才以

降、花街に出入りし博打にふけるようになったきっかけは、天保五年の米騒動の時、暴徒の指導者として逮捕され、投獄の後釈放されたが、その衝撃で沈んでいた彼を元気づけるために、母の幾世が花街での遊びを勧めたことによるとの説もある。十九才の時に、花街の料亭の娘ぬいと結婚するが、生涯を通じて多くの女性と交際があった。また、その相手の女性はいずれもあまり美人ではなく、醜婦を好んだとも言う。そのことから、彼の遊興は考えがあってのことと、単に色好みなのではなかったとする説もある。

大宅壮一氏が「炎は流れる」の中で、このような伝説から、破天荒で痛快な燕石像を作り上げているのに対し、『日柳燕石研究』で相原言三郎氏はひとつひとつの記事に対して細かく批判を行って、より堅実で温厚な燕石像を提示しておられる。興味ある人柄であるだけに、面白い伝説が生まれやすい一方、郷土の英雄として美化される面もあり、真実の燕石像に迫るのはかなり困難である。

ここでは、紀行『旅の恥かき捨ての日記』に関してのみの範囲で、私のとらえた燕石像を述べておくこととする。先に述べたように、これは燕石が弘化元年、二十八才の時、友人の富岡凌雲と行った九州紀行を題材としている。従来、この九州旅行の間の作品としては、「西遊詩草」と題される漢詩百編余があるのみであった。一方で、この旅行は燕石にとって大きな意義を持ったのだとされている。それまで讃岐からよそに出たことがなかった燕石は、長崎でオランダ船を実際に目の前にして、国防についてのこれまでの考えを改めるに至ったと、大宅氏は述べる。また、四国新聞社編『讃岐人物風景』八（昭和五十八年刊）所収「百花繚乱の西讃」にも、次のように記されている。

この旅は燕石にとって単なる物見遊山ではなかったようだ。長崎行きの途中で馬関（下関）に一泊した際、長州の志士とひそかに会合したとの風説も伝えられている。その真偽は定かでないが、この旅が、榎井の里から外へ出て時代の動向をこの目で確かめようとした燕石の心に大きな実りを与えたことは否めない。

だが、この紀行を読むと、燕石がこの旅の中で、どのように真剣に時代と世界を認識したことはあったとしても、全体としてはのどかで楽しい旅であり、深刻さや緊張感は薄い。郷里以外の土地を初めて旅するにしてみれば、燕石の筆致はのびのびと明るく、その行動は大胆で恐れを知らない。土地の旧家に生まれた育ちの良さと、博徒として生きてきた度胸とが、見知らぬ土地でも彼をまったく萎縮させていないようである。

大宅氏が描いた燕石と、相原氏のそれへの反論のいずれが真実の燕石により近いのか、私には判断できない。ただ、この紀行を読んだ限りでは、他の紀行と比べてかなり思い切った行動や発言が印象に残る。そういう点ではやはりどこか型破りな痛快さを持った人物であったかもしれない。

五 『旅の恥かき捨ての日記』の内容

以下に、作品の粗筋を紹介しつつ、その特徴を述べて行きたい。

（イ）上巻

「家ならばけにもるいゝを草枕旅にしあれば椎の葉にもる」という古歌は旅のうき事をいへり。されど、はたご屋のゆふべには味噌醬油の世話も入らず、むまや路のあしたには馬駕籠のたすけあり。ことし天保甲

辰のとし、春も過なんとせし此、富山謙益ぬしに訪はれ、しらぬ火のしらぬ境の風景に心ひかるゝ頼杖を、つくしの果と思ひ立、竹の子笠に藤の杖、画にうつしたる西行法師の立出にて、

世の事を天保のかはとなげすてゝけふ古さとをたつの春風

といった書き出しで始まり、穏やかな春の海を船で渡って下関に着く。ここの遊女町で遊女と遊ぶのだが、一夜明けて相手の遊女の醜さに驚く。

こゝは西国第一の大港にて、立ならぶ大船の帆柱は夏山の木立よりも繁く、行かふ女郎のいもじは、時ならぬ紅葉をちらすに似たり、むかし寿永のいくさの後、平家の女房たち身をよする処もなく、こゝにうかれめとなりしとかや。今は此地の繁昌日に増して、関に千人といひぐさの草よりしげき惣嫁なり。

いにしへの家に伝へし赤旗も今はいもじの色にのこして

此夜船頭木屋の某しにそゝのかされて、新地でふ所の茶屋にいたりしが、いたく酔ひ臥して、おやまをよびたれど、其まゝ寝入りぬ。さて夜明て後にかの女郎を見れば、つら赤く目玉飛出て、よひにくひたりし平家蟹の再来かと思ひし也。

醜い女を好んだという話がある燕石である。好んだかどうかはいざ知らず、女性の顔の醜さに興味を持つ傾向があったのはたしかかなようである。

翌日（四月九日）、船で小倉に渡る。船中では知ったかぶりをする侍の講釈に閉口して眠ったふりをした。

船中に侍あり。いと物しりがほして、四方山の事を語る。おちこちの嶋山をゆびさして曰く、「東は千珠満珠のしま、文字が関に檀の浦、南は名にあふ柳が浦、菊の高浜につらなれり。むかふに見ゆるは剣客のしのぎ削りし巖流島、こなたの迫門は船頭の与次平がたくみも水の泡、跡に残りし石の塔」などゝのぞきの口上のやうにいゝつゞくれば、我等もあひ返答にこまりて、狸寝の空軒をならす。

長ばなし下手の談義をきくやふな南無あみだじの乗合の船

昼前に小倉に着き、船中で知り合った人とともに博多へ向かう。黒崎のあたりで近道をしようとして道に迷い、道連れになった男は、燕石たちを狐ではないかと疑って刀を抜くまねをしたりしてふざける。

船中より土佐の客と心易くなりて、うちつれて行。黒崎の駅を過けるにぬけ道あり。札を立て旅人の通行を禁ず。人々、小首傾けて「本道と此道とは、弓の弦との違ひあり」とて、ぬけ道を行けるが、野に出、山に入るほどにいつしか踏迷ひけん、只蟬の木ばかりおひ繁りたる処にいたりて、事とふべき人もなし。日あし西にかたむき、林の鳥ねぐらに帰り、路も追々くらく成て、あとへもさきへも行難し。土佐の客人、顔色青くなりて我等に向ふていゝけるは、「こりゃ、くそ狐。我をはかりてかゝるうきめを見るか。正体あらはせ」と、腰に帯たるなまくら物をひねくり廻しければ、

狐かと君が思ふもうべなれやわれはたぬきの国の旅人

かく興じて行ほどに、やう吉田のほり川てふ処に至りて、いといぶせき家に泊る。五平太といふ黒き石にて、めしをかしぐ。その煙り、わる臭し。

十一日には、雨の中、香椎と箱崎に参詣する。この紀行には燕石の動皇思想を示すものはほとんどないと言っているのだが、ここの部分の述懐には、ややそういった面が見られるようである。

十一日。香椎の宮にまうでぬ。こゝはむかし神功皇后、から国へ物せし時の古跡なり。巳の刻ばかりより雨しとくふり出しけれど、笠もかしひの宮にもあらねば、涼傘をさしてふせぎしが、雨は篠をつくが如く、風さへあらく吹ければ、謙益ぬしの涼傘風にやぶられて芭蕉の葉の裂たるが如く、やがて紙ひらくと飛ちりて、あとに骨のみ残りければ、

敗れがさのりのちからはたのまねど弥陀の光明身には放しつ

午の刻、箱崎にいたりて旅亭に休ふ。雨少しやみければ、八幡宮のやしを拝す。巍然たる楼門に光りまばゆき金字の額をかけたなり。「敵国降伏」といふ四つの文字は、麟鳳飛動の勢ひあり。延喜の御門の宸筆なりといふ。この御神の威霊はいふもなかくおろかなり。むかし蒙古の軍船、博多の浦に充滿して我瑞穂の国をひと吞と来りしを、神風の力にて十万人のゑびすを塵にし、此宮崎の浜より志賀の島の辺りまで土佐衛門にて海をうづめしとかや。

から人は底のみくづとなりはてゝ波もおさまる千代の松原

十二日に、博多について福岡城下を見物し、狐騒動をともしした土佐の旅人とは筒井村で別れた。この村では、富山謙益の医術の門人、是松良斎を訪ねて歓待される。「其人、文才は格別なしといへども、さっぱりとして面白き人物也」と燕石は評している。十三日にはこの人の案内で、太宰府天満宮へ参詣した。その夜、良斎は鶏の御馳走をし、琵琶法師を呼んで演奏させたが、燕石はあまり面白いと思わなかった。

此夜、良斎ぬし、鶏を煮て〔筑前にては、にわとりを多く食す。俗に「野菜鶏」といふ〕酒をすゝめ、琵琶法師をよびて興を催す。我等いとめづらしき事に思ひけるに、いろ青ざめたる座頭の、白き眼をむき出し黄いろなる声をあげて、女巫の託宣あげるやうな事をいゝければ、我等興も醒けれど、あるじの意に違ふも本意なれば、只「奇妙々々」と、ほめそやす。

くだかけの関より外のお肴はびわの法師の声の塩辛

十六日まで良斎宅に滞在し、「日々酒のむより外に事なし」であつた。十七日に出発して筑後を向かい、十八日には高良山に登り、久留米の町を見物する。十九日には千歳川を舟で下つて瀬高へ着き、そこで泊まっている。この付近では女性たちが半裸になつて農作業に精を出しているのを見た。

此辺り、農事甚忙し。婦人十六七なるものもあり。裸になりて二布ばかりして仕事をなす。その膚のくろさは、なかく久米の仙人も通をうしなふ氣遣ひもなひやう也。

次の日にここを出発する。道に迷つたが人に聞いても方言がひどくて通じず、難渋したが、ようやく米の山に出て、肥後の国に入った。

廿日。つとめて瀬高を立しが野路、糸よりも細く、西にゆがみ東にまがりて、行ほどにいつしか踏迷ひ、農夫に問えど其ことば訛りて、只「ばつてんく」「ばつてん」といふは上方にて「さかい」といふにお

なじ」とばかりにて、一向通ふぜず。されば我々大に困りしが、やうくうつの橋でふ処へ出けり。

「肥後ずいき」を買いいたいなどと話しながら、二十一日に熊本の下城に着き、油のように濃い赤い色の酒を飲んで頭痛に悩まされた。二十三日には熊本城を見物した後、高橋の駅から舟で島原に渡った。舟は客でぎっしりで淀川の夜船のようである。乗っていた島原の人から先年の噴火の時の被害状況を詳しく聞いた。翌二十四日の明け方に船は島原に到着する。港の近くには、噴火の時に飛び散った石で出来たという小島が数多く見えた。

港ちかき辺りに、いとおかしき小嶋いくつもあり。むかし温泉の山崩れし時、海中に飛ちつたる砂石のかくなりしといふ。そのかたち、さまざまにて、牛の眠れるが如く、双子のならぶが如く、釜をふせしが如く、臼を立たるが如く、ちひさくして豆の如く、三角にしてやきめしの如く、ばらくとして基石を置たるが如く、連々として数珠をつなぐが如し、其外千差万別、筆につくし難し。

山をぬくちからもあれば此山をとりて帰りて家づとにせん

二十五日、船で諫早へ向かったが、激しい雨にあってびしょぬれになり、難破するかと思われたが、ようやくのことで諫早に着き、民家で休息した。旅の苦しみをつくづく感じさせられた体験であった。

廿五日、釣舟にて諫早江渡けるに、白雨俄にふりて空かき曇り、白雨盆を傾るが如し。此船はあまのつり船をやとひしなれば、苦さへなくて

人々衣ひたぬれにぬれて、人々鼠の子を水につけしが如し。兎せし角せし内に風いよくつよく吹出し、波は白馬のはしるやうにて舟を左右にゆりうごかし、今も覆りなんとするあり様なれば、人々面色土のやうになりて、すでに念仏を唱ふるばかりなるが、からふじて諫早の辺りにつく。民家にて藁をたき、ぬれたる衣類をあぶりて漸々安堵の思ひをなす。あるじのばゞ、麦のいゝをすゝむるに、誠に貧しき時は妻を擇ばず、飢たる時は食を擇ずといふ辺りにて、各々大によるこびて、五六碗ほど鼻をつくやうにもりてたふべぬ。

かわひ子に旅をさせとのことわざも今ぞ身にしむ諫早の風

二十六日、日見峠を越えて長崎に到着した。峠の麓には「目にかゝる雲やしばしの渡り鳥」という芭蕉の句を彫った石碑があった。ここで上巻が終わる。

（ロ）下巻

下巻の冒頭は、長崎の町の詳しい描写で始まっている。「町の風もどこやら唐めきて、料理屋の軒には、ぶたのゑだを釣り下げ、茶屋の二階には月琴の曲をうたへり」というように、異国情緒の満ちた町は「誠に、『びいどろを倒しにつりし』といふやうな莊嚴」であった。鍋島、黒田の両藩が警護にあたっている番所で、左右の岸に石火矢がずらりと並んでいるのも見た。唐人屋敷を見物したくて、知り合いの儒者に相談すると、このごろは出入りが厳しくなっているが、通訳の部下に化けて行けば大丈夫とのこと、そこまですることはないと思つて燕石は見物を断念したが、後になってやっぱり見ておけばよかったと後悔したのだった。

唐人屋しきを見物せんと石淵仁十郎といふ儒者に相談せしに、「近年八幡物の御制禁きびしくなりて、妄りに館内江入る事を許さず」といふ。されど譯史にたのみて、その僕となりてゆけば随分らくの事もありといへど、かのひげばかりはやしてペアくといふ唐人に逢んとて、人の草履とるのも口惜しき事に思ひてやめしが、あとにては後悔せしなり。

丸山の遊女屋の遊女は実に美しかったが、金がないので見るだけにし、その夜、小さい店の遊女を買ったが、普段肉を食べているからだろうか、その遊女の口が臭くて閉口した。このように、遊女を買ったことをはっきりと記しているのは、紀行では大変珍しい。また燕石は自作の洒落本「金郷春の夕栄」に口の臭い遊女を登場させており、あるいはこの時の印象によるのかも知れない。

此夜いとちひきき茶屋にゆきて、價ひ一貫〔酒肴附〕ばかりのヒヤハチ〔長崎にて遊女を「ひやはち」といふ〕をよびて一夜のちぎりを結ぶ。此女郎の口の中にいとあさましき匂ひしければ、興もさめて打臥しぬ。あとにて考ふるに平生に豚や鶏の肉を食ひけるに依てその臭氣の出しなり。

阿蘭陀屋敷で、オランダ人が遊女を侍らせて酒を飲んでいるのを見る。対馬邸では朝鮮人に会った。

折節、涼み棚場のやうな高き処にて、阿蘭陀人酒のみいたりければ、其下江舟さし寄てつくく見れば、顔白く鼻高けれど、髪はちぎんであかき事、南蛮黍の毛の如し。其側に丸山の女郎と思しき者、二三人並居いたり。こひつも頗るインランダ人と見へたり。

対馬邸の前にて朝鮮人を見るに、顔黒く惣髪にて山伏の姿に似たり。謙益ぬし烟草をのみ居たりしが手を出して乞ふやうにすれば、少しひねりてやりければ大いに喜び、我もくと来たりてもとむ。

五月一日に長崎を出発する。浦上の付近では茶店もなく、民家で茶をもらおうとしたが耳の遠い老婆がいるだけで、返事もしてもらえなかった。しかくなく野原で弁当を食べ、水を飲んだが、後で聞くと、このあたりは疱瘡をひどく恐れる地方なので、燕石の顔にあばたがあったのを見て、疱瘡の神と思ったのであろうと納得した。燕石は小柄で顔にあばたがあったと言われるが、この記事もそれと一致している。

浦上といふ山中を通りしに、峯巒峨々として漢画にかきし山水の如し。人家も少なふしてさびしき処也。我等つかれたれど、腰をかくべき茶店もなければ、路傍の民家に立寄て茶を乞ひけれど、あるじの婆々、響の如くにして返事だにせず。ほとくこうじはて、野原に座して弁当をひらき、水をむすびて渴をしのぐ。後にきゝたれば此辺りは疱瘡をいたくおそれる処にて、我が麻面を見ても痘神と思ひけるにあらんずらんと思ひしなり。

大村では謙益が真珠を買ったが大変高価なものであった。また日光と同じ名のうら見の滝という滝を見物した。

五月四日には大村を出発して、其村で宿をとった。非常に汚い家で閉口する。

四日。大村を立て其村の駅に宿す。いときたなき家なるに、旅人多く

とまりければ枕ふとんの類も不足にして混雑甚し。「のみ虱馬のばりつく枕下」と芭蕉がいゝしも思ひやられけるが、只蚊のひとつも居ざりしは、いとよかりしなり。

五日には嬉野を通過し、駒なき峠を越えた。草鞋が破れたので買おうとしたが、釣銭がないので買えず、裸足で歩くしかなかった。このような記事も紀行では珍しい。同様の状況はよくおこったのではないかと思うのだが、足の豆や草鞋のことを詳しく記した紀行はあまり見たことがない。

うれしのてふ処に休い、鯨の肉にて節句の酒をくみ、酔に乗じて駒なき峠をこゆるに、巖角とがりて剣ぎの如くなれば、草履もいっしか長刀なりぞゆがみてければ、瓦橋てふ処の小店にて草履かわんとせしが、はした銭なかりければ、金を出して「かゑてん」といふに「つりの銭なし」といふければ、せん方なくてはだしになりて行けるが、

草ぐつにかゑる事さへできざればこがねも今はかわら橋なり

六日には唐津に着き、七日には呼子の浦、名護屋城を見物する。九日には福岡近くの今宿に着いて、亀井少琴を訪問し、竹の画を描いて貰った。再び福岡を経て太宰府の良斎の家に、十日から十七日まで滞在する。その間、十三日には志賀島に遊び、漁師の家で酒を飲んだが、その家の妻が口の悪い女であったため、良斎が怒って刀を抜きかけることがあった。

志賀島へ渡りしが、すでに申の刻下りなれば、すなどりする人の家に

宿る。あるじの翁大きな鱸をつりて帰れば、良斎手づから膾に作り酒をくむ。この屋の妻、口さがる女にて、無礼の詞多かりければ、良斎気早き人にて大に怒りて、「我々を誰とか思ふ。福岡藩中某し殿の身内にて某といふ者なり」と、刀にそりを打せければ、あるじ大に恐れ手をすりてわび言をすれば、やうく怒をおさめ、残りし酒を温めて夜半まで飲め。

命とるさじにやいたくおそれけん腰にさしたる赤鯛より

また十六日には良斎の友人の蘭学者と謙益が議論をするのに燕石も加わって激論になったので、良斎が仲裁した。

良斎ぬしが友だちに、権丈立輔といふ蘭学の医師あり。弁舌流水の如くして、議論を好む人なりければ、良斎、我々が嘯し相手に呼寄しが、一夜、究理のはなしを謙益めしと論ずるに、蘭説家のくせなれば、神儒の二道をあしざまにいふにぞ、我等横槍を入れて舌戦の火花をちらすに、此男中く屈伏せざれば、後にはたがひに高声になりて罵りあふに、良斎の毒がりて和睦をはかり、末は酒にぞ成りにける。

蟹のはふやうな横むりいゝつりの滅多無少におらんだの流

十八日には良斎宅を出て、宇美八幡に参拝、八木山を経て、二十日には小倉に着き、船で下関に向かった。乗っていた相撲取りが、小倉の悪口を言つて自分の郷里の広島をほめており、燕石もやや同感であった。

午の刻ばかり雨やゝはれければ、舟を艤して下の関へ渡る。乗合に芸州の相撲取りあり。小倉の城下を顧みていゝけるは、「此町はいと貧乏ら

しくて城下のやうにもなし。我国広嶋にくらぶれば月と籠との如し」と。
是は我国鼯鼠のやうなれど、少しは其理もありと思ひければ、

立続く家居小倉の名物の帯のやうなるせばき町哉

二十一日には下関で、宿の主人の依頼に応じて書を書いて与えた。恥
ずかしい思いであつたが、主人は大いに喜んで酒をふるまつた。二十二
日の正午に下関から船出した。船はやはり大変な混みようで、各地の方
言が耳についた。

午の刻ばかり、阿弥陀寺の早といふ舟をかる。乗合みちくで膝をい
るゝ処もなし。あたまは尻とかちやうて、韓信がむかしを思ひ、足は腹
をふん張て敵子陵がおもかげに似たり。されど大勢ののりくみなればい
ろゝおかしき事もあり。江戸ッ子のそゝり節に耳の穴をつきぬかれ、
越後者の大訛りに腹の皮をよぢらせり。

こうして船旅十日の後、六月三日に琴平に無事到着する。

我をまつ尾の象山はまだ見へねども、ほど近し。指をかゞめて過越し
方を考ふれば、三百余里の長程を行、六十三日の日数を経たりしが、是
も鼯鼠が夢となり、はや一炊の粟島やたくまの浦の夕なぎに帰る布帆も
つゝがなく、たがひにめでたく賀しにけり。

この後に、最初に紹介した三井雪航の書き入れがある。

全体を通して、資料的にも貴重な記事が多い。また、他の紀行が往々
にして書き落とす旅の日常を率直に記しており、目のつけどころや表現

に感覚の鋭さを感じられる。好奇心旺盛で、齒にきぬきせない作者の人
柄が全編にみなぎっている。

六 松莊の添削について

雪航の末尾の一文にもあるように、この紀行には奈良松莊が細かい添
削を加えている。文脈を整理したり、意味がわかりにくい部分をわかり
やすく変えているところもあるが、要するに俗語もまじえてやや乱雑な
燕石の文体を、ととのつて優雅な雅文に近づけようとしている。だが燕
石の文の方が、破格な部分もあるけれど生き生きとしていて魅力的であ
る。

近世の紀行は、中期から後期にかけて国学者たちの多数の作品の中か
ら、伝統的な和文の面影を守りながらも、漢文調や俗語をも用心深くと
り入れた、新しい雅文を創造することに成功している。松莊の添削によつ
てすべてを直せば、ほぼそのような新しい雅文体になるだろうと思う。
しかし、燕石の原文にあった活気は失われる。この紀行の定本は、やは
り燕石の原文によって作られるべきだろうと思う。

七 おわりに

この紀行の中に登場する、太宰府の医師は松良斎、その友人で蘭学者
の権丈五輔、長崎の儒者石淵仁十郎などについては、どういう人かまだ
不明である。御教示頂ければ幸いである。

本稿は、平成七年度西日本国語国文学会においての発表に加筆したもの
である。なお、貴重な資料の閲覧をお許し下さった国立国会図書館、
金比羅神社資料館、瀬戸内民俗資料館に深く感謝する。

注

- 1 仮綴じの写本一冊。全集に収める「吞象楼遺稿」の抜粋か。
- 2 「一冊、狂歌 猿赤山人」とある。実物は「よしこの」を集めたものの。
- 3 燕石はこの時まで郷里を出たことがなく、淀の川舟も実際には知らないはずである。それでもこのような表現が出てくるのは、この言葉がそれほど有名だったのか、あるいは彼が大坂に行ったことがあるのか、なお検討の余地があろう。
- 4 豚の四肢のこと。
- 5 日本文学協会発行「日本文学」一九九六年十月号所収の拙稿「近世紀行の存在」を参照されたい。